

発刊に寄せて

愛育研究所
所長 及川 紀美子

教職退職後、愛護会の職員として4年程かかわった時から早5年、この度縁あって研究の手伝いをする事になり、浦島太郎の心境のまま研究発表と第19号となります研究紀要の発刊という大役に戸惑いながら、役を全うできるのか不安に感じ、例年になく暑い夏にさらに脂汗まで滴らせた次第です。しかし、それぞれの施設から選ばれた意欲的な研究姿勢に溢れる職員の研究レポートと、それを纏めるために前向きに取り組む研修委員を中心とする関係職員に助けられ、発刊の時を迎えることができ、ほっと胸を撫で下ろしております。

研究紀要に収録されております各施設から選ばれた研究内容は、さすが19号まで歴史を重ねてきた研究の実績が確実に職員に定着してきていることを強く感じさせられる内容であり、精一杯取り組んでいる職員の姿をその一部ではありますが皆様にお届けできることに幸せを感じております。皆様方からは、よろしくご指導を賜りますようお願い申し上げます。

さて、どの職業でもその職に自信と誇りを持ち、日々の研鑽を怠らずキャリアアップしながら全うしていくことが求められており、それがプロとしての職業人の姿であると思います。その中でも直接人との関わりが主である福祉職員の研修の重要性は言うまでもありません。日々の実践が係わりが全て研修そのものであると言っても過言ではないと考えます。

しっかりと子供達や利用者と向き合う中で、課題が見えてきて、その課題を解決するためにどのような手立てを組み実践していけば良いのか、当然理論研究も必要になりますし、周りの職員や父母地域の方々との連携も必要になります。1人ひとりの研究姿勢がお互いに影響し合い、切磋琢磨し合いながら伸びていく。その風土が園全体、施設全体のモチベーションを高めていくことに繋がって行くことを願っているところです。今までの研究実績に自信を持ち、更なる日々の研鑽を積み上げ、プロの福祉職員としてより質の高い子育てや支援を目指して努力して欲しいと思いますし、愛育研究所がその研究の要となる重要な役割を果たし、サポートしていかなければと決意を新たにしているところでもあります。

最後になりましたが、ご寄稿いただきました皆様と関係各位に心より御礼申し上げます、簡単ですが発刊にあたっての挨拶と致します。